

止 め 名

能村 研三

宗左近と登四郎

二〇一六年に詩人の宗左近の没後十年を記念して市川市国府台の里見公園に詩碑が建立された。

碑面には市川讚歌の詩の一節

曙いま世界が垂直

市川 芯の透明

はばたく虹の風たち

が刻まれている。

詩碑の建立をきっかけに改めて宗左近を顕彰しようと市川で宗左近と親しかった人たちと一緒に「宗左近・芯の会」という文化団体を立ち上げた。この会は現在市川市芸術文化団体協議会にも加盟しており、九月十二日から十七日まで市川の全日警ホールで開催される芸文協主催の「文化集会」では、「芯の会」で宗左近と能村登四郎の交友関係をテーマに展示を行う予定である。

宗左近は同じ市川に住んでいたこともあって、「沖」の周年記念号には玉稿を頂戴し、二十五周年の記念大会では講演もしていたとい

る。そして何より深く印象に残っているのが、平成十三年先師登四郎が亡くなった時に葬儀で弔辞を賜ったことである。弔辞と言ってもそれは宗

大南風その気になれば出来ること
受けて立つ構へに立ちて大西日
革靴を素足履きして街に出る

左近の詩で綴られたものであったことに胸を打たれた。文化集会では宗左近がそれを便箋にペン書きで書いたものの展示も予定している。

平成九年、宗左近の提唱により民間団体が設けた「市川市民文化賞」の第一回目の受賞者に登四郎を選んで下さった。今から思うと宗左近の考えの中には最初から登四郎ありきでこの賞が制定されたように思えてならない。

梅雨明けの山河の澄みに心置く
漆喰の鰻波均し梅雨明くる

登四郎も数多くの賞を受賞しているが、地元市川で市民からの推薦で受賞したことを大変喜んだ。

その翌年、この賞の記念として国府台スポーツセンターの陸上競技場の一角に

春ひとり槍投げて槍に歩み寄る

の句碑が建立された。

宗左近が登四郎の著書『人間頌歌』に寄せた一文で次のように書いている。

この槍は、獲物を狙ったのではない。対象など、ありえない。ただ、投げないわけにいかない。そして突き刺さったとき、傷むのは大地でなくて、槍である。だからこそ、震えている槍に歩み寄る……

瑞兆の空に喜鵲の鳴き渡る
ごきぶりを三角点に追ひつめし

能村 研三